

カントの超越論的観念論において 夢はどのように考えられるか

太田 伸一

1. 夢と観念論⁽¹⁾

カントの超越論的観念論とは、どのような「観念論」なのであろうか。我々はこの論文でこのような問題を考えようとする。「我々の外の空間における対象の現存在を単に疑わしく証明できないと、あるいは偽であり不可能であると説明する理論」を（実質的）観念論と言う（B274）⁽²⁾。しかし、カントはこのような観念論を「観念論論駁」（B274-B279）において論駁している。したがって、超越論的観念論は外的対象の存在を否定するような、あるいは疑うような「観念論」ではない。それでは、カントの超越論的観念論はどのような意味での「観念論」なのであろうか。

外的対象の存在を否定する、あるいは疑う、上述のような観念論の論拠の一つが夢の経験である。夢は主観的表象であって、夢の中に現れてくるものは、空間中に実在するものが感覚されているのではなく、構想力（想像力）によって描き出されたものである。しかし、夢と目覚めている時の経験を区別する確かな徴表はない。目覚めている時に経験しうるようなことはすべて夢の中でも起こりうるのである。したがって、私は今目覚めているのではなく、眠って夢を見ているのかもしれない。そして、私の外に存在すると思われているものも、実は構想力の産物であって、空間中に実在してはいないのかもしれない。空間における対象の現存在は疑わしいのである。このような議論はデカルトの『省察』に見ることができる⁽³⁾。このように、デカルトにおいては外的対象の存在に対する懐疑と夢の経験とは深く結びついているのである。さらに、デカルトは『省察』の最後に至って、外的対象の存在に関する、このような疑いを斥け、外的対象の存在を認める。すなわち、上述のような観念論は否定されるのである。そして、この時には、目覚めている時の経験と夢との間にも明確な区別が認められる。すなわち、私の全生涯の他の部分と結びつけられうる事物は覚醒時に経験されているのであり、結びつけられない事物は睡眠中の夢に見られているだけなのである⁽⁴⁾。このように観念論が否定さ

れる場合にも、デカルトにおける観念論と夢の経験との密接な関係を見ることができるのである。

それでは、カントの超越論的観念論において、夢はどのように考えられるのであろうか。カントは『プロレゴメナ』で夢について次のように言っている。「真理と夢の間の相違は、対象に関係づけられる表象の状態によって決められるのではない。なぜなら、表象は両者において同じだからである。真理と夢の間の相違は、客観の概念において表象の連関を規定する規則に従った表象の結合によって、そして、表象が一つの経験においてどこまで共存しうるか否かによって、決められるのである。⁽⁹⁾」ここで、カントが真理（目覚めている時の経験）と夢の相違について述べていることは、先のデカルトの場合と同じである。夢においても覚醒時の経験においても表象は同じであり、両者を区別しうる確かなしるしはないのである。目覚めている時の経験と夢とは、私の全生涯、私の経験の全体（「一つの経験」）に対する関係によって区別される。私の経験の他の部分と整合的に結びつけられうる表象は目覚めている時の経験であり、結びつけられえない表象は夢なのである。この「夢」が統覚の超越論的統一やカテゴリーとの関係においてどのように考えられるか、もう少し詳しく見てみよう。その考察を通して、超越論的観念論がどのような「観念論」であるかを明らかにしよう。

2. 夢と統覚の超越論的統一

まず、統覚の超越論的統一との関係において夢がどのように考えられるか、見てみよう。

『我思う』は私のすべての表象に伴うことができねばならない（B131）。「我思う」という同一の自己意識（超越論的統覚）が伴いえないということは何も意識されていない、何も表象されていないということと同じことなのである。そして、私のすべての表象において自己意識の同一性（統覚の超越論的統一）が表象されていなければならない。そうでなければ、それらの表象は私の表象ではないことになるであろう。しかし、私の表象は多様である。それら多様な表象がそれぞれ別々に意識されているだけでは、自己意識の同一性は表象されない。多様な表象は総合されていなければならない。その総合のはたらきが同一の自己意識においてなされることによって、多様な表象のそれぞれに伴う自己意識の同一性が表象されうるのである。「私は与えられた表象の多様を一つの意識において結合しうるということによってのみ、これらの表象における意識の同一性そのものを表象しうるのである」（B133）。この同一の自己意識においてなされる総合のは

たらきによって、私のすべての表象は統一されて私の一つの経験となる。この総合のはたらきは一定の規則に従って、整合的になされねばならない。私の経験の全体の中に規則に従わない、不整合な部分があれば、私のすべての表象に伴う自己意識の同一性は表象されないであろう。したがって、私のすべての表象は私の経験全体の中に整合的に位置づけられていなければならないのである。

しかし、明らかに私の一連の表象の中には不整合な部分がある。その時、私はその部分をどのように考えればよいのであろうか。夢だと考えるのである。(あるいは空想や誤った判断など主観的な表象であると考えるのである。我々はここで主観的な表象の代表として夢を取り上げているのである。)

夢の中では、経験的知識に反するような不思議なことも起こりうる。夢の内容は私の経験の全体の中に整合的に位置づけられない。しかし、私が夢を見るということは不思議なことでも、不整合なことでもない。毎夜のように経験する、ありふれたことである。私が眠るということは私の経験の中に整合的に位置づけられうる。それとともに私の夢も夢(主観的表象)として私の経験の中に整合的に組み込まれうる。自己意識の同一性にとって不都合が生ずるのは、客観的表象が相互に不整合で、結びつけられえない場合である。したがって、客観的表象が相互に不整合であってはならない。しかし、主観的にしか妥当しない表象が相互に、また客観的表象と不整合であっても、自己意識の同一性に関して不都合はない。夢(主観的表象)は夢(主観的表象)として私の経験の中に位置づけることによって、不整合は解消されるのである。したがって、私の表象の中に不整合な部分があれば、私はその部分を主観的な表象であると考えればよいのである。そうすることによって、不整合が解消され、自己意識の同一性が保たれるのである。

私のすべての表象において自己意識の同一性が表象されていなければならない。そして、そのためには、私のすべての表象は一つの経験の内に整合的に位置づけられていなければならない。しかし、私の表象の中には不整合な部分がある。統覚の超越論的統一に関わる、この「不整合」の問題は、今見たように、「夢」(主観的表象)によって解決される。不整合な部分を夢だと考えればよいのである。我々は、不整合が見つかる度に、夢から覚める度に、この「不整合」の問題を「夢」によって解決しているのである。また以上の議論から、目覚めている時の経験と夢との相違は、表象が私の経験全体の内整合的に位置づけられうるか否かという点にある、ということは明らかである。私の経験全体の中に整合的に位置づけられうる表象が目覚めている時の経験(客観的表象)であり、そうできない表象が夢(主観的表象)なのである。『プロレゴメナ』において「真理と夢の間の相違は、……表象が一つの経験においてどこまで共存しうるか否かによっ

て決められる」と言われた通りなのである。そして、この区別の根底には統覚の超越論的統一がある。経験と夢、さらに一般に客観的表象と主観的表象を区別しうる徴表はない。経験と夢は一つの経験の中での整合性・不整合性によって区別されるだけで、表象としては同じなのである。それにもかかわらず、両者が区別されるのは、整合的に統一できない複数の経験があれば、自己意識の同一性が保たれないことになるからである。自己意識の同一性のために、不整合な部分が夢として覚醒時の経験から区別されねばならないのである。自己意識の同一性が必要なければ、すなわち私の表象がばらばらな多様でよければ、客観的表象と主観的表象を区別する必要はないのである。客観的表象と主観的表象の区別は、その根底に統覚の超越論的統一があってはじめて意味を持つ。このように、統覚の超越論的統一は、表象の客観性と主観性の区別の根拠なのである。こうして、統覚の超越論的統一との関係において「夢」を考えることによって、目覚めている時の経験と夢とがどのようにして区別されるかが明らかになっただけでなく、そもそも何故、経験と夢とが区別されるべきであるかも明らかになったのである。

3. 夢とカテゴリー（1）

さて、整合・不整合ということについてももう少し考えてみよう。経験と夢、客観的表象と主観的表象は、私の経験全体の中に整合的に位置づけられうるか否か、によって分けられる。ここで言われている「整合的」あるいは「不整合的」とはどのようなことであろうか。経験と夢を分ける整合・不整合の基準は何であろうか。論理的な矛盾であろうか。しかし、私の経験は（私の夢も）時間という形式に従っている。時間における変化ということを考えれば、たとえば、同じ花が赤いと表象され、また赤くないと表象されても矛盾ではない。この二つの表象は時間という形式に従って、私の経験の中に整合的に位置づけられうるのである。一方が目覚めている時の経験であり、他方が夢であるということにはならないのである。矛盾律⁽⁶⁾は時間を捨象して論理的に判断の真偽（客観性・主観性）を判定する際に有効な基準である（矛盾を含む判断は真ではありえない。しかし、矛盾を含まないからといって真とは限らない。したがって、消極的な基準である）。しかし、我々が今考えている経験や夢のような、時間という形式に従った表象の整合性・不整合性を判定する基準ではありえないのである。

経験や夢のような、時間という形式に従った表象の客観性と主観性を分ける整合・不整合の基準はカテゴリー（純粹悟性概念）⁽⁷⁾である。

多様な表象において自己意識の同一性が表象されうるためには、私のすべての表象は

同一の自己意識において総合されていなければならない。そして、この総合のはたらきは一定の規則に従っていなければならない。総合が無秩序になされたとすれば、その総合のはたらきにおける自己意識の同一性は保たれないのである。この統覚の超越論的統一の下になされる総合のはたらきの規則がカテゴリーである。私のすべての表象はカテゴリーに従って総合され、一つの経験の内へと統一されていなければならないのである。カテゴリーは多様な表象を総合して、一つの経験を可能にする条件なのである。

目覚めている時の経験と夢は、このカテゴリーに従って私の経験全体の中に整合的に統一されるか否かによって区別されるのである。このことは、夢はカテゴリーに従っていないということの意味するのではない。経験と夢を分ける整合・不整合は私の一つの経験全体の中での整合・不整合であって、他の部分から切り離れた表象の系列の内部に不整合があるかどうかということではないのである。「我思う」は私のすべての表象に伴うことができねばならない。したがって、夢にも伴うことができねばならない。そして、「我思う」という同一の自己意識に伴われうするためには、私のすべての表象はカテゴリーに従っていなければならない。したがって、夢もカテゴリーに従っていなければならない。少なくとも、夢の中の私は、まわりで起こっている出来事はカテゴリーに従っていると考えているのである⁹⁾。我々は、カテゴリーに従わない対象を想像することも、夢に見ることもできないのである。カテゴリーに従わない表象は混乱したばらばらな表象でしかない。統一された一つの夢でさえないのである。カテゴリーは経験の統一を可能にする条件であるだけでなく、夢の統一を可能にする条件でもあるのである。

夢の中の対象も空間的・時間的な外延量を持つものとして表象されている。また、その感覚は内包量を持つものとして表象されている。すなわち、夢の中の対象は量と質のカテゴリーに従うものとして表象されているのである。関係のカテゴリーについては「原因」と「結果」を取り上げて考えてみよう。夢の中の出来事も原因－結果のカテゴリーに従っているものとして表象されている。目覚めている時の経験において、私はすべての出来事の原因を知っているわけではない。むしろ、原因が分かっている出来事の方が少ないであろう。科学的に解明されていないという意味で、あるいは科学者は知っているが私は知らないという意味で、原因が分からないということもあるであろう。また、結果だけが知覚されていて、原因は知覚されていないということもあるであろう。また、私はすべての出来事の原因に関心を持って詮索するわけでもない。しかし、いずれの場合も経験された出来事に原因がないとは考えないのである。夢の中の私も同様である。夢の中で起こるのは原因の分からないことばかりである。経験的に知っている個別的な因果関係に反するようなことさえ起こる。しかし、そのような場合にも、夢の中の私は

それらの出来事に原因がないとは考えないのである。夢の中の出来事も原因—結果のカテゴリーに従っているものとして表象されているのである。様相のカテゴリーに関しても、夢の中に「現実」に現れてくる対象は、夢の中では現存在として表象されているのである。

夢の中では、経験的な科学法則に反するようなことも起こりうる。しかし、カテゴリー（あるいはむしろカテゴリーから導き出される「純粹悟性の原則」）に反することは起こりえないのである。夢の中でも、対象はすべてカテゴリーに従っていると表象されているのである。このように、経験の他の部分から切り離して、夢の内部だけを考えれば、カテゴリーに関する不整合は見出されないのである。

不整合は経験と夢との間（あるいは夢と夢との間、あるいはさらに夢とその夢の中の夢との間）にあるのである。夢の中に現れるいかなる対象も経験の対象とカテゴリーによって整合的に結びつけて表象することはできない。たとえば、今経験されている机の大きさと夢の中に現れた机の大きさを比べてみることはできない。両者を同じ物差しで測ることはできないのである。経験と夢は量のカテゴリーに関して不整合なのである。また、経験の対象と夢の対象を感覚の内包量に関して比較することもできない。経験と夢は質のカテゴリーに関しても不整合なのである。また、夢の中で起こる出来事の原因を経験の対象に求めることはできない。（私がそのような夢を見たということの心理的・主観的な原因を目覚めている時の経験に求めることはできる。しかし、夢の対象の客観的原因を経験の対象に求めることはできないのである。）経験における因果の系列と夢における因果の系列は交わらないのである。経験と夢は原因—結果のカテゴリーに代表される関係のカテゴリーに関しても不整合なのである。また、経験の中では不可能であると表象されたことが、夢の中では可能である、あるいは現実的であると表象されうる。経験と夢は様相のカテゴリーに関しても不整合なのである。

このように、経験と夢をカテゴリーによって整合的に統一することはできない。経験と夢はカテゴリーに関する不整合によって分けられるのである。

4. 夢とカテゴリー（2）

ここで、カテゴリーについて次の二点を補足しておこう。

カントはカテゴリーを「判断表」（A70=B95）に示された判断の論理的形式から導き出す。たとえば「物体は重い」という判断は、「物体」の表象と「重さ」の表象が「重い物体」という一つの対象の表象において客観的に結合されている、ということの意味する。

「太陽は石を暖める」という判断は、「太陽は石を照らす」という表象と「石が暖まる」という表象が「太陽は石を暖める」という一つの出来事の表象において客観的に結合されている、ということの意味する。「客観的に」ということは、統覚の超越論的統一の下になされる総合のはたらきによってということであり、カテゴリーに従って、ということである。カテゴリーに従って客観的に結合されえない二つの表象（経験に含まれる表象と夢に含まれる表象）が判断という形式において結びつけられることはない。「判断は、与えられた認識を統覚の客観的統一の下にもたらず仕方に他ならない」（B141）のである。こうして「カテゴリーの表」は「判断表」から導き出されるのである。

経験は経験的直観に基づく認識である。カテゴリーが経験的直観に適用されるためには図式（「その下においてのみ純粹悟性概念が使用されうる感性的条件」（A136=B175））が必要である。カントによればカテゴリーの図式（超越論的図式）とは「超越論的時間規定」である。（「純粹悟性概念の図式機能について」（A137-147=B176-187））したがって、経験と夢がカテゴリーに関して不整合であるとは、具体的には対象の時間規定に関して不整合であるということである。すなわち、経験の対象と夢の対象を同じ時間の内に整合的に置くことができないのである。そしてまた、経験と夢は時間に関して不整合であるということである。すなわち、経験の時間と夢の時間は整合的に統一されえないのである。経験と夢の間の不整合は、抽象的・概念的にはカテゴリーに関する不整合として表象され、具体的・直観的には時間規定に関する不整合として表象されるのである。

5. 夢とカテゴリー（3）

経験と夢、客観的表象と主観的表象はカテゴリーに関する不整合（または時間規定に関する不整合）によって分けられる。私の経験全体にカテゴリーに従って整合的に付け加えられうる表象が経験であり、そうできない表象が夢である。そして、夢は夢として私の経験の中に位置づけられねばならない。さて、カテゴリーはアプリアリな概念である。しかし、カテゴリーに関する不整合がいつも明晰に意識されうるわけではない。眠って夢を見ている時でも、私の経験全体との整合性を考えれば、それが夢であるか経験であるかを識別することができるであろう。しかし、実際には夢と知りつつ夢を見ていることはまれである。経験から夢に入る境界があいまいで、不整合に気づかないまま夢を見始めているのである。（このような場合でも、不整合が意識されていない以上、自己意識の同一性に支障はない。）したがって、いかなる場合にも私は今、夢を見ているのではないか、不整合に気づいていないだけなのではないかと疑ってみることに正当な根

拠がある⁹⁾。しかし、私の表象がすべて夢なのではないか、すべて主観的な表象にすぎないのではないか、そして表象の客観性と主観性の区別には意味がないのではないか、という懐疑には根拠がない。すでに見たように、表象の客観性と主観性の区別の根底には統覚の超越論的統一がある。統覚の超越論的統一は必然的である。したがって、表象の客観性と主観性の区別も決して無意味になることはないのである。統覚の超越論的統一が存する限り、私のすべての表象が主観的であるということはあるにない。客観的な表象の一つの系列（経験）がなければならないのである。

この私の経験全体の内容は常に変化するものである。私はこれまでに経験したことのすべてを覚えているわけではない。また、私の経験は完結したものでもない。私はこれからも新しい経験を積み重ねて行くのである。ある表象が経験であるか夢であるか、客観的表象であるか主観的表象であるかは、その時に経験全体と考えられている表象の系列との整合性・不整合性によって経験的に判定される。そして、経験全体の内容が変化するに応じて、客観的であると考えられていた表象が主観的であると考えられるようになり、また逆に、主観的であると考えられていた表象が客観的であると考えられるようになることもありうるであろう。しかし、整合・不整合の基準はカテゴリーというアプリアリオリな概念である。そして、私の経験の全体がどのように考えられるとしても、経験のすべての対象はカテゴリーに従っているということがアプリアリオリに認識されるのである。

6. 超越論的観念論

以上、統覚の超越論的統一やカテゴリーと夢との関係を考察してきた。その結果を基にカントの超越論的観念論がどのようなものであるかを考えてみよう。

統覚の超越論的統一が客観的であると言われる。(B139)すでに述べられたように、これは超越論的統一が経験のような客観的表象にだけ伴い、夢のような主観的表象には伴わないということではない。超越論的統一が私のすべての表象に伴うのである。統覚の超越論的統一が客観的であると言われるのは、それが表象の客観性と主観性の区別の根拠だからであり、さらに客観的表象の客観性の根拠だからである。表象の客観性と主観性の区別の根底に統覚の超越論的統一が存することはすでに見られた。多様な表象において自己意識の同一性が表象される必要がなければ、一つの経験の内に整合的に統一されえない表象を主観的表象として客観的表象から区別する必要もないのである。対象（客観）との関係を有するか否かによって、客観的表象と主観的表象が区別されている

のではない。表象の客観性と主観性の区別は、対象との関係において成り立つのではなく、統覚の超越論的統一との関係において成り立つのである。

それでは、客観的表象の客観性とは何を意味するのであろうか。私の一つの経験において客観的表象はカテゴリーに従った必然的な仕方で相互に結合されていなければならない。私の経験の全体とはこの必然的な結合の全体なのである。そして、この必然性は統覚の超越論的統一の必然性に基づく。統覚の超越論的統一が必然的であるから、私のすべての表象は一つの経験の内へとカテゴリーに従って統一されねばならないのである。客観的表象の客観性とはこのカテゴリーに従った統一の必然性を意味するのである。

超越論的観念論とは、表象の客観性と主観性の区別の根拠は統覚の超越論的統一（超越論的主観の統一）であるということ、そして、客観的表象の客観性が対象との関係を意味するのではなく、カテゴリーに従った統一の必然性を意味するという、このようなことを主張する立場なのである。

しかし、超越論的観念論は、空間における外的対象の存在を否定するのではない。経験のような客観的表象の対象は空間中に存在すると考えられ、夢のような主観的表象の対象は存在しないと考えられる。そして、統覚の超越論的統一が根底に存する限り、表象の客観性と主観性の区別が無効になることはありえない。したがって、空間における対象の存在・非存在の区別が無意味になることもありえない。また、すべての表象が主観的であることもありえず、したがって、いかなる対象も空間中に存在しないということもありえない。ただ、超越論的観念論は、外的対象が客観的表象の客観性の根拠であることを否定するのである。したがって、空間における外的対象の存在は、なんらかの表象からその客観性の根拠として推論されているのではない。外的対象は表象の客観性の根拠として存在するのではないのである。超越論的観念論は、「対象」や「表象の客観性」という概念の意味をとらえ直すことを求めているのである。

空間における外的対象の存在は、むしろ直接的に意識される。空間における外的対象は私自身の現存在の時間規定を可能にするものとして存在する。そして、時間的に規定された私自身の現存在の意識は、空間における外的対象の現存在の直接的な意識なのである。このようにして、外的対象の存在を証明するのが「観念論論駁」である。しかし、ここではその証明の詳細な分析に立ち入ることはできない。

注

(1)(参考) Lewis White Beck, *Did the Sage of Königsberg Have No Dreams?* in *Essays on Kant and Hume*, Yale University Press, 1978; Jean-Maie Beyssade, *L'Expérience Du Rêve et L'Extériorité* (De Descartes à

Berkeley), *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, 176, 1986

(2) 『純粋理性批判』からの引用箇所は (B274)、(A70=B95) のような形で本文中に示す。

(3) デカルト『省察』「第一省察」(Descartes, *Meditationes* I (AT,VII19-20,IX14-15))

(4) デカルト『省察』「第六省察」(Descartes, *Meditationes* VI (AT,VII89-90,IX71-72))

(5) カント『プロレゴメナ』§13注III (Kant, *Prolegomena* §13AnmerkungIII (Ak.IV290))

(6) 「いかなるものにも、それと矛盾する述語は属さない。」(A151=B190)

(7) 「カテゴリーの表」(A80=B106)

(8) 夢は主観的な表象であって、夢の対象は客観的実在性を持たない。したがって、その対象がカテゴリーに従っているというのも、いないというのも意味のないことである。ここで問題にするのは、夢を見ている私がどのように表象しているかということである。

(9) 私は今、夢を見ているのではないか、という懷疑は哲学的な反省としては正当な根拠を持つ。しかし、生活の上では不必要な懷疑である。眠って夢を見ている時に目覚めている時の経験であると思っているとすれば、私は間違っているのである。しかし、間違っているとしても所詮は夢の中のことである。目が覚めた時に、今のは夢であったと気づくことができればよいのである。そして、目が覚めた時には、ほとんどの場合、容易にそして間違いなく夢と経験を区別することができるのである。

(京都大学大学院博士過程学修)